

独立性易の書学思想及び近世日本の書道への影響*

賈 光佐

はじめに

独立性易(一五九六～一六七二、本名戴笠、字曼公、号天閑老人等)は、一六五三年に明清の混乱を避けて日本に渡り、翌年に隠元隆琦(一五九二～一六七三)の下で出家した人物である。独立は書道に優れ、著述や弟子教育に勤しみ、日本の近世書道の原点と論じられ⁽¹⁾、また中国の書道を実際に日本に伝えた第一人者⁽²⁾と評価されている。独立の書学思想を研究する際に、一六六〇年に完成した『斯文大本』と二六六八年に作成された『臨池述意⁽³⁾』に焦点が当てられるのがほとんどである。両者の内容は一貫しており、後者は前者の縮小版であることにより、独立が『斯文大本』で論じる思想は、その成熟した思想であることが分かる。独立の書道史上の地位は広く認められているが、その影響に関する研究はまだ十分でない。独立が論じたことが、当時の多くの日本の書家にとって理解しづらかったため、それほど重要視されなかったとする説もある⁽⁴⁾。実際、独立の書学思想は当時の日本の書壇で激しい議論を引き起こした。そこで、本稿では、独立の六書字に基づいた書体と書史批判に焦点を当て、その学説が日本で引き起こした論争を考察することにより、独立の書学思想が近世日本の書道界に与えた影響を明らかにする。

キーワード 独立性易、斯文大本、六書字、日本書道、細井広沢、沢田東江、古法書学

一 矧夫字学、皆本六書…六書学に基づく書学思想の探究

『斯文大本』という書物は、埼玉県平林寺に所蔵されているが、筆者はまだ見ることができていない。二〇一五年に徐興慶が編纂した『天閑老人…独立性易全集』に『書論』という題名で掲載されているが、以下の問題がある。まず、『書論』という題名の問題から検討しよう。富岡鉄斎(一八三六—一九二四)が独立のこの著述を再び表装し、木箱に収めた。その表紙と木箱に「独立禅師真跡書論」と題したため、一部の学者⁽⁵⁾がそれを『書論』と呼んでいる。しかし、独立は文中で何度もそれを「大本」と呼んでおり、さらに「書論」と呼ぶことが一回もないため、『斯文大本』こそ、その著述の正確な題名であるに違いない。次に、徐氏が整理した文章の字形と断句に誤りが多く存在して、誤解を招きやすい。第三に、独立が説明する字形を直感的に理解することができず、独立の考えを理解する上で大きな障害となっている。これらの理由から、本論文では、大阪大学所蔵本⁽⁷⁾に基づいて、独立の書学思想について考察する。

『斯文大本』は、「自叙」「六義原本」「書法原本」「統附…臨池二用」「自跋」「再跋」という六つの部分からなる。独立は、「自叙」の冒頭で、「六義」は当時の人々には重要視されていないことを明らかにし、中国と「同文」の日本に対して、『説文解字』を「求学之本」にしようという号令を発している。

字繇一画之始、文成六義之中。一画具而万象出、六義析而变化通(中略) 博士家不遡其源、考其本、争向杪杪梢頭、摛文掇錦、曰好学、曰能文、益何味味其至真之用耶(中略) 求学之本也、試向『説文』九千三百九十三字中、一一求致其源、則文外無剩義、義外無剩文、心・声・言・用、一理悠帰、始可云同文之学也。已握管臨池、求全合用。直造千古文心、是可云「同文共学」也已(字は一画から始まり、文は六義において成立する。一画がそろえば万象が現れ、六義がわかれば、その変化が理解できる(中略) 博

士たちはその源を遡らず、その根本を考察せず、高いところや端っこで文飾りや錦繡を競って、好学だとか能文だとかと言っているが、それでは真の用途をどうやって見抜くのであろうか(中略) 学びの根本を求めらば、『説文解字』に収められた九千三百九十三字の一つ一つについて、その源を求めるならば、文に余る義はなく、義に余る文はなく、心・声・言・用は、一つの理に帰し、それではじめて同文の学びと言えるのである。筆を持って書を書く以上、完全性を求めて、用途に合う。千古の文心に直接に至って、それが「同文共学」だと言えるのである。

『説文解字』を通じて六書を勉強しようとする日本の書家に呼びかけるのは、何のためであるか。それは、「再跋」において明確に説明されていた。そこで、独立は自分が「妄者」の書した「月」と「出」の字形について批判を加えたことよって、その「妄者」に敵意を持たれた。このことが『大本』を執筆する直接的な原因であると述べている。独立は「八行載紀、六義重扶。不啻斯文之有在、可冀吾道之逢源(日本に来てからの八年間で、六書の学問を復興するために努力していた。そのような文字字の存在に恥じないように、私が守ってきたこの学問が受け継がれることを期待している)」と述べているように、彼が日本に到着してから『大本』を完成するまでの八年間、「六義」を復興する努力をしていた。

「六義原本」において、独立は「象形」「指事」「形声」「会義」「転注」「仮借」という六義の概要を例を挙げて説明し、また「隸変」と「俗筆」を批判している。特に典型的な例として、「月」と「出」の字の書き方を挙げている。「隸変」については、「月」体恒缺、指示両弦上下之虧。微仄于右、象其西墜。邈隸仄方変之(月字の書き方は、常に不完全なものである。これは、上弦の月や下弦の月の欠けた形を表している。少し右に傾いているのは、月が西に沈むことを象徴している。程邈が創出した隸書では、その傾きを方形に変えた)と指摘している。「俗筆」については、「出」出者、象草根茸茸四発、以見初茁之形、不従二山。山之三山、以象

峰巒、下一以指砥地、豈有山峰尖上復加山耶。俗筆相沿、不致其思者（出という字は、草の根がふさふさと四方に伸びて、芽が出る形を表している。二つの山からできていのではない。山という字は、三本の縦線で山々の連なりを表している。下の部分は地面を示している。山の頂上にさらに山があるはずはない。これは一般の人々の書き方が伝えられてきて、その意味を真剣に考えなかったために起こったことである）」と批判している。

これに続いて、独立は漢代の許慎の『説文解字』から唐代の孫愐の『唐韻』までの六書学の著作を詳細に列挙している。当時では最も包括的に整理された六書学の歴史書だといっても過言ではない。

「書法原本」では、六書の学習方法を総括し、「贅文」と「省文」を識別することが学習の目的であることを説明し、「妄加点画」という低俗な風潮を批判している。

真心学六書、以開千古之洪濛者、先覓許氏『説文』一部、以明六義本始、為入門大綱。字字俱當求致其源、潛翫考索、通幽入微。以別贅文、省文之用。若至妄加点画、以飾俗眼、貽蛇足之可笑已。既得大綱、旁通『韻会』・『字彙』・『小補』、全其鋪叙、可尽六書之為学也已（六書を真心で学び、千古の混沌を開こうとするものは、まずは許慎の『説文解字』を手に入れて、それによって六義の根源を明らかにし、入門の概要とするのがよい。文字ごとにその源流を求めて、深く探究し、微妙な点にまで立ち入ることで、点画の増減を弁別する。もしむやみに点画を加えて俗人の目を惹こうとすれば、それは蛇足の笑いものになるだろう。大要を把握したら、『韻会』や『字彙』や『小補』といった書物も参照して、その記述を全て理解すれば、六書を学ぶには十分である）。

ここでの『韻会』とは元の黄公紹の『古今韻会举要』を指し、『字彙』とは明の梅膺祚の著述であり、

『小補』は明の方日昇の『古今韻会举要小補』を指している。独立は、『字彙』に対して非常に高い評価を与えており、「善彙衆芳、因人之学、不著己見。一時索解、不可不備于挿架者（多くの人の長所を取り入れて、先人の学問を伝えており、私的な意見を述べない。すぐに問題を解決するのに役立つため、本棚に置かなくてはいけないものである）」と述べている。しかし、『全集』の編者はこの文章を「一時索解不可、不備于挿架者（すぐに問題を解決することはできないため、本棚に置いてはいけないものである）」と誤って句切したことより、その意味が正反対に変わってしまった⁽⁸⁾。

その後、独立は六義が字学の基本的な前提条件であると述べている。

矧夫字学、皆本六書。未識六書而言字者、猶未識弓矢而言中的、未諳宮商而称赏音。昌黎先生云、「読書先須識字、不識字不可謂之読書」。徐鉉曰、「非文字無以見聖人之心、非篆籀篆対無以究文字之義」。今人不知執筆而言字、攬掇也者、而曰「文無愧其心」、綵不知個中有道也（字学というものはみな六書に基づいている。六書を知らずに文字について語る者は、弓矢を知らずに的を射ることについて語る者や、音階を知らずに音楽を鑑賞すると称する者と同じである。韓愈は言った、「書物を読むにはまず文字を知らなければならぬ」。文字を知らなければ、そもそも書物を読むとは言えない」と。徐鉉は言った、「文字がなければ聖人の心を見ることができないし、篆書や籀書が無ければ、文字の意味を究めることができない」と。今の人々は、筆を執ることも知らずに文字について語っており、それは適当に言っているだけである。それなのに、「文章は心に背かぬ」と言つて、全く文字の奥義を知らないのである）。

独立は当時の人々がなぜ六義から離れて書を作ったのかについて次のように指摘している。

今人学書而亡六義、縁相承也。徐鍇昔譏曰、鍾王者、六書之罪人也。蘇黃者、書法之罪人也。一以変乖六義、一以用仄筆単鈎、争両撃之(今の人々が書道を学んでいるのに六義を失っているのは、伝統に従っているからだ。徐鍇はかつて嘲笑して言った、「鍾・王という者は、六書の罪人だ。蘇・黄という者は、書法の罪人だ」と。一方は六義を変化させて背き、一方は斜めの筆遣いと単鈎の筆遣いを使っている。どちらも打ち負かすべきだ)。

実際には、徐鍇が亡くなった時に、蘇・黄はまだ生まれておらず、徐が蘇・黄を批判することは不可能である。しかし、朱熹が鍾・王・蘇・黄について「二王書某曉不得、看着只見俗了(中略)字被蘇黃胡乱写壞了(中略)子瞻単鈎把筆。錢穆父見之曰、『尚未能把筆邪』。山谷不甚理会得字、故所論皆虚(二王の書道について、私はよく理解できず、見ても俗っぽいとは思えなかった(中略)文字は蘇黄によって乱雑に書かれて壊れてしまった(中略)子瞻は単鈎で筆を持つ。錢穆父がそれを見て言った、「まだ筆を持つことができないのか」と。山谷は文字をあまり理解していないので、彼が論じることはすべて虚しい)⁽⁹⁾」と批判していることから、独立が徐鍇の批判とするものは、実際には朱熹の発言であると思われる。

さらに、独立は、各書体及び法帖の悪化という事実について、「董玄宰手仿前人筆意、総是渠儂半辺鼻孔、瞎却時人眼睛。書学熄矣、無能為矣(董其昌は先人の筆意を模倣したが、彼もまた半分しか理解しておらず、現在の人々の鑑賞力を低下させた。書学はすでに停滞し、どうすることもできない)」と董其昌を批判している。字体及び字形の悪化、書法作品の喪失や歪曲という現状に対し、独立は復古を主張している。

篆・隸非秦漢不可以法、真・草非晋唐不足以学。今併失其所法・所学之原、可無慨哉。其宋元蘇・

黄・米・蔡・掲・趙諸君子、明世祝希哲・王雅宜・邢子願、雖曰席上之珍、風氣藐矣。況今日之董・文、尤不足以誇前、尚敢曰、「繼臨池之一薪」耶(篆書と隸書は秦漢時代でなければ法としては不十分であり、真書と草書は晋唐時代でなければ学ぶには不十分である。今ではそういう法と学の手本となるものが失われてしまい、悲しまずにはいられない。宋元時代の蘇黄米蔡掲趙の君子たちや、明代の祝希哲・王雅宜・邢子願などは、席上の珍品と言われても風流と気概は微かである。ましてや今日の董其昌・文徵明などは、先人に誇ることさえできず、「臨池の一薪を継ぐ」と言えるであろうか)。

唐以降の書家は学ぶべきではないと説明した後、書道を学ぶ上で「憤発一心、従上源而摠正令。従予『書法原本』中、行苦行、頭陀之行、匠心独造、直至心手合一(勤勉に専心して、源に従い、同時に正しい学問に従うべきだ。私が著した『書法原本』の中で、苦行と頭陀行を行い、自分自身の品位を創造し、心と手が一致する境地までに至ろう)」と述べている。

二 雪山―広沢の独立の書学思想に対する批判

著述による書学思想の伝播のほか、独立は教授にも勤しんでいた。『先哲叢談続編』には、独立の書法が日本で伝承されたことについて以下のように記録されている。

曼公以其法伝之於北島雪山及高天濤。雪山伝之於細井広沢、天濤伝之男頤斎。頤斎伝之於沢田東江。而後広沢、東江雖有異論、至其執筆五法、把筆三腕、撥鐙等説、皆淵源于曼公之所授受。且用水筆麝墨、我土先是無管知之者、又流漫於曼公之所教示云(曼公は自分の方法を北島雪山や高天濤に伝えた。雪山

は細井広沢に伝えた。天漪はその息子、頤齋に伝え、頤齋は沢田東江に伝えた。その後、広沢と東江とは意見を異にしたが、五つの筆管の握み方や筆を持つ際の三つの腕の動き方や撥鐙法などの説は、みな曼公から教わったものに由来していた。また、水筆と麝墨を使うことは、我が国では初めて知られたことで、それも曼公から教示されたものだ⁽¹⁰⁾という。

先学らは詳しく検討せずにこの説を採用したため、独立の書学は北島雪山(一六三六―一六九七、名は三立、字は雪山)とその弟子細井広沢(一六五八―一七三六、名は知慎、字は公謹、号は広沢、室号は思胎齋など)および高天漪(一六四九―一七三二、別姓は深見、名は玄岱、号は天漪)、天漪の子である高頤齋(一六九二―一七六九、別姓は深見、名は玄融、号は頤齋)と、頤齋の弟子である沢田東江(一七三二―一七九六、姓は源また平林、平という。名は鱗、字は文竜、景瑞、号は東江また東郊、室号は来禽堂など)の二つの系統に伝承されたという説が確立され⁽¹¹⁾、さらに独立が最初に「撥鐙法」を日本に伝えた⁽¹²⁾とされている。

注目すべきは、天漪―東江の一派と雪山―広沢の一派では、独立の書学に対する態度が異なっているということである。前者は独立の思想を信奉し、発揚することに努めていたが、後者はそれを批判し反対していた。『近世名家書画談』の「雪山逸事」においては、雪山が独立に書法を問うたことが記されている⁽¹³⁾が、これは『続編』の誤解を継承したものである。より信憑性があるのは、広沢の子である細井九皋(一七一一―一七八二)の次の記述である。

黄檗隠元其徒數十人長崎に来る。隠元の弟子即非ハ善書也。雪山先生も書のことを即非に問れけるとなり。即非の筆法、伝来有り。黄檗中の善書也。独立は隠元の書記也。元来俗人にて俄に剃髪して日

本に来るゆえ、法儀には疎かりしとなり。尤二王の法ハなし。撥鐙の法を不用。故に雪山先生とも外の友なれとも、書のこととは不問となり¹⁴⁾。

この記述により、雪山は最初から独立の書道に批判的な態度を持っており、独立に書道を尋ねたことは一度もなかったことがわかる。雪山―広沢派が最も重視するのは、雪山が兪立德から「口授面命」によつて得た「撥鐙法」である¹⁵⁾。この一派が独立に反対する根本的な理由は、独立が「撥鐙法」を使わないことにある。「撥鐙法」について、広沢は『紫薇字様』において以下のように述べている。

斯方執筆一法、大乖於古法。慎先師執法出于衡山文先生。所謂二王以来相承正脈撥鐙法也。其妙不可説焉。世之所伝双鉤・懸腕・虚掌・实指等、名称雖同、实用大乖。宜乎。号为唐様而筆迹迺仍旧本国習気也。嗟乎。一步謬千里（この執筆法は、古い方法とは大きく違っている。慎先師（細井広沢）の執筆法は、衡山文先生（文徵明）から学んだものである。いわゆる二王以降に伝わってきた正しい撥鐙法である。その妙は言葉では表せない。世間で伝えられている、双鉤・懸腕・虚掌・实指など、名前は同じでも、実際の使い方は大きく違っている。良いか！唐風と呼ばれながらも、筆跡はまだ本国の悪い慣習に依っているのだ。ああ、一歩間違えたら千里も外れてしまう¹⁶⁾）。

ここで言及されている文徵明から発展した雪山派の筆法は、まさに独立が批判しているものである。また、独立が「書法原本」において主張した「双鉤」「懸腕」「虚掌」「实指」などは、広沢によつて「本国（日本）の慣習」と批判されていた。この二つの執筆法の根本的な違いは、指と筆の動きに関する見解

である。独立によれば、筆を持つ場合、必ず「直管対心」でなければならぬ。そうでなければ六書を乱す俗筆であるとする。そして、日本の「斜管輕挑」はその典型例とされる。独立が「手緊捉管、全不働指、運之以腕、以肘・以肩・以身、則一画・一直・一点・一鈎、無不是精神蟠結処。若一動指・動筆、則鋒芒外出而神漓矣(筆をしっかりと握り、指を全く動かさず、手首、肘、肩、身体を使って筆を動かすことで、一画・一直・一点・一鈎など全てに精神的な緊張が感じられる。指や筆を動かすと、鋭さが失われ、神髓が散漫になってしまう)」と主張している。一方、広沢は、「一概二握リツメテ腕臂肘肩ヲ用テ書セヨト云」のを「和伝」で「非常に大きな誤り」とみなし、「按懣厭鈎掲抵導拒送」という「指を動かして筆を動かす」八つの方法を「撥鐙法」に要約している⁴⁰。興味深いことに、どの筆法が主張されようとも、中国の書法を重んじ、日本の書法を批判する点は共通している。

筆法だけでなく、広沢は独立の厳密な字字観に対しても、鋭い反論を持っている。

近日俗間好読字書者、以為非本字則無其義、而甚至乎謂鍾王為倉頡之罪人。且逢省一画・添一点者、視之如寇讐焉。此畢竟不達結繩之真意、不識隸變之古意。職由不多讀古人之書矣。殊不知制誥冊・書聖經・賢伝未嘗必古字本字、而孰為非詔誥、孰為非典謨。而矧今隸靚出而未幾、鍾王業已以俗字通用。点画増減、出新意以具芸林之美觀矣。今也此編專要救流弊、見者察焉(今の世には、字書を読むのが好きな人が多いが、本字でなければ意味がないと思つてゐる。しかも、鍾王を倉頡の罪人だと言つて、一画省いたり一点足したりする字を敵視している。これは結局、結繩の真の意図を理解せず、隸書の変化の古意を知らないからだ。古人の書をもつと読まないといけない。制誥や聖經や賢人伝などを書くときに、必ずしも古字や本字を使つていたわけではないということは特に知られてゐない。それらは詔誥や典謨ではないのか。それに、今の隸書

はできて間もなく、鍾王は俗字を使って広く通じるようにした。点画の増減や新しい意匠は、芸術的な美しさを表現するためだった。今回のこの編は、流行に流されるのを防ぐために作ったものだ。見る人はよく考えてほしい¹⁸⁾。

こうして見ると、広沢が重んじる「新意」と「美観」の考え方と独立が重視する字学の正確さは、正反対のものであることが分かる。さらに、広沢は具体的な字形においても独立と異なる観点を提起している。例えば、独立は「山山」という書き方が「出」字のよくない書き方であるとしているのに対して、広沢の『紫薇字様』では¹⁹⁾と書かれ、傍注に「古詩有拆字詠曰、『藁砧今何在、山上復見山』。或時出之、亦一佳趣爾。堯母碑作²⁰⁾(古詩には、文字を分解して詠んだものがあり、こう言っている。「藁砧今何在、山上復見山」。このようなものはしばしば表れて、また良い面白さがある。堯母碑も²¹⁾に作る)」と記している¹⁸⁾。

広沢は『篆体異同歌』において本は、「好読字書」という風潮に同調しており、自分の篆書に対する理解を述べ、自分が正しいと思っている篆書の字形を示している。これに対して佚山黙隱(一七〇二―一七七八)は、趙頤光(一五五九―一六二五、号凡夫)の『説文長箋』を基にした『補闕篆体異同歌』を書いて、広沢を批判している。

炎漢以降六書廢、文字本訓半存亡。津梁肆政更俗貌、広沢道雲添華妝。溷雜異同未究原、謬譌更改不能詳。因証趙氏『長箋』說、庶使篆形埒正當(漢代以降、六書の書き方は廃れ、文字の本来の意味や読み方は半ば失われた。津梁と肆政は俗字を改めて、細井広沢と池永道雲はそれに華麗な飾りを加えた。混然とした『篆体異同歌』では根本を究明することができず、誤って変えたり改めたりするので詳細な理解ができない。そこで私は趙頤光の『説文長箋』の説明に基づいて、篆書の書体を正しくしたい)²⁰⁾。

『長箋』における篆字は、独立が尊崇するものである。独立本人によれば、彼は『長箋』の原稿を目にし、趙氏による刊刻の依頼を固辞したという。最終的な刻本は「書傭手繕、以俗筆作古文（雇われた筆写者が書いたもので、古文を流行りの書き方で書いたものである）」という憾みがあるものの、「幸首叙篆文、猶是凡夫五指（幸いにも、冒頭の篆書は趙頤光が自分で書いたものだ）」（斯文大本・六義原本）と評された。

独立は篆書を研究し、篆刻に優れていたことから、日本近世篆刻の初伝と見なされている²⁰⁾。東江は、「精於款識、金石之刻。人求品題、造請無閑（款識と金石の篆刻に精通している。人々に鑑定や題字を求められて、それに応じて作って暇がない）」と称された²¹⁾。これに対して、雪山は篆刻を禁じ、いわゆる「宇宙独歩、絶不打印（宇宙の中で唯一無二であり、絶対に印章を作らない）」となった²²⁾。

雪山・広沢一派は独立の書学と書法を強く批判していたが、その結論からわかるように、彼らが批判せざるを得なかったのは、当時の書道界で独立の学問が前提となっており、書道界の避けて通れない問題であったからである。独立がこれほどの影響力を持つことができたのは、彼自身の学識と積極的な宣伝だけでなく、天濤・頤齋・東江などによる継承と発展が極めて重要だったためである。

三 沢田東江の独立の書学思想に対する発揚

次に独立が日本に六書学を最初に伝えたかどうかについて検討する。次のように、林道栄（一六四〇～一七〇八）が日本の六書学の初伝とされる記述がある。

道栄家世長崎人（中略）好臨池技、篆隸行草無体不善。善書之名、喧伝遠邇。当時我土所謂書家者流、未知臨摹之法、運筆之訣（中略）道栄嘗得文衡山・董華亭之真蹟、始識運筆懸腕之事。又与北島雪山、

講習六書学。我土知六書学者、実始于此。高天濤・池永道雲・佐玄竜・細井広沢等、皆由是而興起云(道栄は家系が長崎にあった(中略)書道を好み、篆書・隸書・行書・草書など、どんな字体も得意だった。書の名人として、遠く近くに評判が広まった。当時の日本では、いわゆる書家と呼ばれる人たちは、模写の方法や運筆のコツを知らなかった(中略)道栄は文衡山(文徵明)や董華亭(董其昌)という名筆の真筆を手に入れて、初めて筆を動かすこと及び腕を上げることを知った。また北島雪山という人と一緒に六書の学問を講習した。日本で六書の学問を知る人は、実はこれが初めてである。高天濤や池永道雲・佐玄竜・細井広沢など、みんながそれで興味を持った²⁹⁾。

前に述べたように、雪山一派は六書学に反対していたが、道栄がいう「六書」は実際には「大篆」「小篆」「八分」「隸書」「行書」「草書」の六種類の書体を指している²⁹⁾。これは『先哲叢談』にある「林兼諸体」からも裏付けられる。また、天濤は独立の弟子であり、道栄に六書学を学ぶ必要がないだろう。また、道栄が尊重する文征明や董其昌の書は、六書学の趣旨とは大きく異なっている。しかしながら、道栄の当時の書道界に対する影響力も無視できない。

道栄曰、「以我邦人運筆学晋唐人遺蹟、猶如鈍刀彫木、僅得形似、去其真也遠矣、豈非徒勞乎。然知之者尠矣。臨書之法、与唐山異同不一、其小者姑置之、大者有五。一曰盼望不正、二曰筆毛不軟、三曰楮紙強硬、四曰案卑矮倦、五曰体不寬洪(道栄は言った。「我が国の人々が筆を使って晋や唐の名人の墨跡を学ぶのは、鈍い刀で木を彫るようなものだ。形式上の相似を得ることにとどまり、その本質からは遠く離れており、無駄な努力ではないか。しかし、それを知る人は少ない。臨書の方法は、中国と異なり、小さいことはとも

かく、大きいことは五つある。一つは長時間見ると目が斜視になるといふこと。二つ目は筆の毛が柔らかくないこと。三つ目は楮紙が硬くて滑らかでないこと。四つ目は机が低くて疲れやすいこと。五つ目は体格が大きくないことだ」⁸⁰⁾。

ここから、独立が秦漢・晋唐の復古を主張しているのに対し、道栄は日本人が晋唐の書道を学ぶことに批判的な態度を持っていたことがわかる。彼が論じた日中の異同は、視力・筆のつくり・紙・机・身体などの外的な側面に集中している。独立も「続付・臨池二用」で机のつくりなどの問題について言及し、日本式の低い机は当時の渡日華人にとつてかなり不都合だったことがわかる。また、道栄の日本の筆作りに対する批判に触発されたのか、広沢が『思貽齋管城二譜』で筆作りの問題を専門に論じており、その中の毛穎譜は、当時舶来品の唐の筆に刺激を受けて作られたものである⁸¹⁾。それに対して、東江は筆作りについて重点を置く傾向を批判し、「凡文房之具、成爲供玩弄・悦心情之物、如謝（肇制）所言、煞風景也（文房具というものは、遊んだり楽しんだりするためのものになってしまったら、謝肇淵が言ったように、それは風情を失ってしまふ）」と述べている⁸²⁾。また、『東江先生書話』では「能書筆をえらはずといふ話」という一節もある⁸³⁾。

頼春水（一七四六～一八一六）によると、「林道栄・高玄岱二人、在長崎為一時名手。道栄学即非、玄岱学独立（林道栄と高玄岱は、長崎で一時代を築いた名筆であった。道栄は即非から書を学び、玄岱は独立から書を学んだ）」という⁸⁴⁾。つまり、道栄は即非の影響を強く受けた一方、独立の書学を発展させたのは弟子の高天濤一派であり、その思想は東江の著作にまとめられている。願齋は東江の『書学筌』の序文においてその伝承を証明している。

嘗天閑老人及我先大人各有所著、未上梓而為烏有、余老後尚無所說。卒東郊為編、門人大悅(中略)東郊不食言、予保之而已矣(昔、天閑老人と我先大人という二人の書家がそれぞれ本を書いたが、出版される前に失われてしまって、私は老いても何も語るこがなかった。やがて東郊が本を編集して、弟子たちは大喜びした(中略)東郊は約束を守ってくれた。私はそれを保証するだけだった⁽³¹⁾)。

この伝承について、東江は非常に自信を持っており、「東方書法之有伝来也、特吾高氏云尔。然則欲学華而純乎華者、於今時、舍吾其誰(中国の書道が伝来できたのは、特に私の師である高玄岱を介したということである。しかし唐様の書を学び、さらに唐様の精髓まで身につけようとするもの、現今では、私以外に誰もいない)」と自負している。一方、広沢らに対しては、「其所為務卑卑焉、取媚流俗。其徒往往汎濫江湖。庸立者、持門戸。皮相者、矜影響(やることは低俗で、流行に媚びている。その弟子たちは、書道界に広く溢れている。表面的な者は、自分の門派を堅持する。皮相な者は、自分の名声を誇る)」と批判している。東江は「凡学書者、面承華人善書者、且不可無学問書(書を学ぶ者は、華人の中で書道に優れている人々と直接対面し、かつ学問を欠かさず学ぶことが必要だ)」⁽³²⁾と主張しているが、これは、雪山が即非と兪立德に学んだことに対する批判である。即非と立德について、東江は「ソノ中タマタマ華人ヨリ習得タル人モ、其師タル人、タダ黄蘗ノ僧徒、或ハ長崎ヘ交易ニ来ル人ノ書ヲウツスナリ。尤僧徒ニハ禅気アリテタマタマ風流ナルアレトモ、法トシ用ユルニ足ラス。況ヤ交易ニキタル人、書ノ事ハ一向ウトキナリ」と批判している。つまり、東江からすれば、即非も兪立德もともに学ぶには値しないものである。

「東江於六書、博考詳究、用力甚勤。其於漢晋唐宋之金石遺文、訪索殆尽、収蔵頗富。又於我邦中世之残碑断碣、窮搜摩搨、審度真偽而弁定之(東江は六書について詳しく調べて勉強し、とても一生懸命に働いて

た。彼は漢や晋や唐や宋の時代に残された金石で書かれた文字について、ほぼ全部探して集めて、収蔵も豊富だった。それに日本の中世に残っている壊れた石碑などについても、力を尽くして探してこすって、本物かどうかをよく調べて判断した⁸⁵⁾」という『先哲叢談後編』の記述のように、六書学を研究することと中世の碑文を調査することに集中している。

東江は、趙子昂や文征明を崇拜している日本の書家たちについて、「かく文盲なる心より、たまたま古法帖を見れば、『字彙』・『韻会』のごとく、ただ字体を檢出すまでの用なりと思ひ⁸⁶⁾と批判している。ここで挙げられている『字彙』と『韻会』は、まさに独立が推奨している六書学の著作であることには注意すべきであろう。また、東江は『篆説』と『隶説』という書体に関する著作を著して、独立の思想を發展させている。特に『篆説』は、江戸と大阪で出版された最初の篆書書論である。曹悦はそれが当時中国から来た船で輸入された『説文解字』を参考にしたと述べているが、実際には、前述のように、東江の『篆説』は独立の学説を發揚したものである。また、近世日本で『説文解字』が初めて刊行されたのは一七一四年である。このことから、『説文解字』などの書物が近世日本で重視されたのは、独立の影響から生じた「好読字書」という風潮によるものであることがわかる⁸⁷⁾。次に、東江が日本の中世の碑文を「摩搨」や「弁定」したことは、独立と天濤から伝えられた「打碑法」の伝承であり、独立が伝えたこの法が日本の墨本の始まり⁸⁸⁾となったことから、日本の書道界への貢献の大きさがうかがえる⁸⁹⁾。

東江が三十年以上にわたり、著作や弟子の指導などに注力した結果、独立の書学思想は体系化され、影響力のある「古法書学」に發展した。「古法書学」について、東江は「余始唱古法書、世人或疑且怪。余唯従所好。今且三十年矣、而四方学者苟欲習書、則必言晋唐法書(私が古法書を提唱し始めた際に、世間の人々は疑問を抱いたり奇異に思ったりした。しかし私は自分の好むことだけに従う。今や既に三十年が経ったが、四方

の学者たちは書法を学ぼうとするならば、必ず晋唐時代の手本的な書について語らなければならない」と語っている。⁽⁴⁰⁾

おわりに

本稿では、独立『斯文大本』の思想と主張について分析し、雪山―広沢系が独立から継承されたという通説の誤解を正した。また、独立の書学をめぐる、古典的な学問に基づき、書学の性格を尊重することを主張する「古法書学」と、美的観点から出発し、書道の技術を重視して、獨創性を提唱する「雪山―広沢系書道」が形成されたことを指摘した。独立六書学の思想とそれを基にして構築された書道理論は、後の日本の書道の発展に深く影響を与えた。同時に、独立の提唱した「千古文心、同文共学」という理念は、日本の近世という二百年余りにわたる華文崇拜の思潮を開いた。

*この論文は、一九八二年に創刊され、中国文学芸術界連合会が主管し、中国書道家協会が主催する美術、書道、彫刻、写真の学術雑誌である『中国書法』の第三九八号に掲載された「独立性易的六書學與日本近世書法」(九六頁―一〇八頁)に加筆したものである。

【注】

- (1) 米田弥太郎『近世日本書道史論攷』、京都・柳原書店、一九九一年、第三頁。
- (2) 米田弥太郎『近世日本書道史論攷』、京都・柳原書店、一九九一年、第二六頁。
- (3) 『臨池述意』は、九州大学の「三奈木黒田家文書」文庫に所蔵されており、誤って『監池述書』と命名されている。

所在記号は一五八。

(4) 中田勇次郎『中田勇次郎著作集』第六巻、東京・二玄社、一九八五年、第三七五頁。

(5) 石村喜英『深見玄岱の研究…日中文化交流上における玄岱伝と黄檗独立禅師伝』、東京・雄山閣、一九七三年、第四九頁。

(6) この文章を書く動機を説明した後、「此『大本』之由作焉」と述べ、その作品が完成したときに「『大本』適成」と言及している。

(7) 『斯文大本』、大阪大学懐徳堂蔵、請求記号：110031明18H1。以下はその文書からの引用で、章の位置を示す。

(8) 徐興慶『天間老人…独立性易全集』、台北・国立台湾大学出版中心、二〇一五年、第一〇一頁。

(9) 朱傑人等『朱子全書』、上海古籍出版社、二〇〇二年、第四三三六頁。

(10) 東条琴台『先哲叢談続編』第一巻、東京・千鍾房、一八八三年、第二二丁裏。

(11) 上原昭一・王勇『芸術』(中西進・周一良『日中文化交流史叢書』七)、東京・大修館書店、一九九七年、第二九九頁。

(12) 石村喜英『深見玄岱の研究…日中文化交流上における玄岱伝と黄檗独立禅師伝』、東京・雄山閣、一九七三年、第四五五～四五六頁。

(13) 安西於菟『近世名家書画談』二、内閣文庫蔵請求記号：198-0406冊次：0002、第八丁表。

(14) 大和永年『二老略伝…九臯先生譚録』上巻、一七七二年、筑波大学附属図書館蔵、請求記号：7400-135、第四丁裏～第五丁表。

(15) 大和永年『二老略伝…九臯先生譚録』上巻、一七七二年、筑波大学附属図書館蔵、請求記号：7400-135、第四丁裏。

(16) 広沢先生『紫薇字様』、江戸・小川彦九郎、一七二四年、神戸大学附属図書館・社会科学系図書館貴重書庫、請求記号：10-5-80、第一四丁表～第一四丁裏。

- (17) 細井知慎『広沢執筆秘伝鈔』、国文学研究資料館・石野家本 28。
- (18) 広沢先生『紫微字様』、江戸・小川彦九郎、一七二四年、神戸大学附属図書館・社会科学系図書館貴重書庫、請求記号：10-580、第七丁裏。
- (19) 出典は古楽府詩、原文は「山上復有山」。
- (20) 常足道人佚山述『補闕篆体異同歌』、小川多左衛門、一七七八年、新潟大学附属図書館蔵、請求記号：39-226-2 第一丁表
- (21) 中田勇次郎『日本の篆刻』、東京・二玄社、一九六六年、第一一五頁。
- (22) 東条琴台『先哲叢談後編』第八卷、大坂・京屋淺次郎「ほか四名」、一八二九年、第二二六頁。
- (23) 角田簡大可『続近世叢語』第八卷、江戸・岡田屋嘉七、一八四五年、第一四頁。
- (24) 東条琴台『先哲叢談続編』第一卷、東京・千鍾房、一八八四年、第三頁。
- (25) 石村喜英『深見玄岱の研究…日中文化交流上における玄岱伝と黄檗独立禅師伝』、東京・雄山閣、一九七三年、第二八一頁。
- (26) 東条琴台『先哲叢談続編』第四卷、東京・千鍾房、一九八四年、第三頁。
- (27) 西川寧『日本書論集成』第四卷、東京・汲古書院、一九七八年、第一頁。
- (28) 平東郊『書学筌』(岸上操『少年必読日本文庫』第十一編)、東京・博文館、一八九一年、第三二頁。
- (29) 沢田東江『東江先生書話』上之卷、一七六九年、筑波大学図書館蔵 請求記号：F28019、第八丁裏。
- (30) 関儀一郎『続日本儒林叢書』第四冊、東京・東洋図書刊行会、一九三三年、第三二頁。
- (31) 平東郊『書学筌』(岸上操『少年必読日本文庫』第十一編)、東京・博文館、一八九一年、第九頁。
- (32) 沢田文治麟『東郊先生書範』、一七五九年、東北大学狩野文庫蔵、狩5157521、第四丁表。

- (33) 沢田文治麟『東郊先生書簡』、一七五九年、東北大学狩野文庫蔵、狩515521、第九丁表。
- (34) 平東郊『書学筌』(岸上操『少年必読日本文庫』第十一編)、東京・博文館、一八九一年、第二二頁。
- (35) 東条琴台『先哲叢談後編』第八卷、大坂・京屋淺次郎「ほか四名」、一八二九年、第二六頁。
- (36) 沢田東江『東江先生書話』上之卷、一七六九年、筑波大学図書館蔵 請求記号：F230.19、第一六丁表。
- (37) 曹悦「江戸時代における日本の篆書書法の受容状況について」：江戸・大坂出版書目を中心に、(『東アジア文化交渉研究』第十二巻、二〇一九年、第九〇頁。
- (38) 沢田東江『東江先生書話』下之巻、一七六九年、筑波大学図書館蔵、F230.19、第一〇丁表。
- (39) 米田弥太郎『近世日本書道史論攷』、京都・柳原書店、一九九一年、第八七頁。
- (40) 東江源鱗文竜「跋文」、李攀竜・東江源鱗文竜『東江先生書唐詩選』下巻、嵩山房 小林新兵衛、一七八四年、国文学研究資料館蔵、請求記号：F83173。